スー・ブライドヘッドは「冷たい」か

ハーディの『日陰者ジュード』を読む

川　崎　明　子

1.1

『日陰者ジュード』の主人公ジュードはスー・ブライドヘッドを「きみは霊、体のない生き物、愛しくて可愛いくてじれったい幻、肉体のほとんどない人」と形容する[1]。スーの肉体性の欠如は、ジュードによって繰り返し言及され、ジュードに焦点化した語り手によって数回示唆され、多くの批評においても受容されている。川本静子はスー像の三つの支配的類型として、男性を破滅に追いやる運命の女、「ファム・ファタール」、1880年代頃に登場した「新しい女」と並んで、肉体の対極としての精神を挙げている[2]。早世した大学生との同棲生活、夫フィロットソンとの結婚生活、恋人ジュードとの初期の共同生活において、確かにスーは性的接触を持たなかった。それはフィロットソンやジュードにとって現実に大問題となっている。スーの性的欲望に乏しいという「セクシュアリティ」は小説の中で正面切って長々と議論される[3]。このようにスーの肉体性の欠如はテクストの表面で強調されている。

しかし一方でテクストにはスーの性的欲望の確かな痕跡が見つけられる。スーの性的欲望は決して欠如している訳ではなく、非常に見えにくくなっているに過ぎないのだ。スーの肉体性の稀薄さを前提にした論文が多い中で、スーの性的な属性を指摘する論文もいくつかある[4]。しかしそれらはスーの主体的性欲についてまでは議論していない。ましてやテクストでなぜどのようにスーの性欲が見えにくくなっているかについては立ち入っていない。

本論文では、これまで極めて指摘に乏しかったテクストのスーのセクシュアリティについての多弁とスーの性的欲望そのものについての寡黙という際立った不均衡について論じる。なぜスーの性欲はこれほどまでテクストにおいて抑圧されているのだろう。その際従来の多くの批評のように時代のコンテクストからスーの解読を試みるのではなく、テクストの語りのレベルに注目し、スーの性的欲望を見えにくくする二つの構造を分析する[5]。テクストにおけるスーの性的欲望の抑圧を手がかりに彼女のセクシュアリティとセックスの表象の不可解な乖離を追求していくと、主人公ジュード自身の欲望、語りの欲望、ついには作者ハーディの指向までもが見えてくる。

1.2

本格的な議論に入る前に、精神的な人と捉えられがちなスーの性的欲望の痕跡を確認しよう。それはアポロとヴィーナス像の購入やスウィンバーンやシェリー愛読といった間接的なものにとどまらない。

まず無数のジュードとのキスである。スーはしばしばよくないことだとしながらもジュードをキスに導き、自らもキスをする。よくないという認識があるのだから、スーにとってキスは多かれ少なかれ性的な意味合いを持っていることがわかる。第四部「シャストンで」でのキスは明らかに性的なものとしてスーとジュードに捉えられている。口論の後いったん別方向に歩き出した二人は、同時に振り返って駆け寄り「しっかりと長い」キスをした。ジュードはこれを自分の人生の「転回点」になったと判断し、スーも「燃えるようだった。恋人同

士のキスみたいだった!」と振り返っている[6]。

そして何より決定的なのはスーの妊娠の事実である。卵を胸で温める、豚を扱うなど動物的かつ多産の印象を与える豊満なアラベラが子供を一人しか産んでいないのに対し、「霊のような」スーは三人を立て続けに妊娠している。確かに彼女はフィロットソンとの身体的接触を嫌って窓から飛び降りた。しかしフィロットソンをそこまで拒否したスーがジュードの子供を次々に妊娠することは、逆に彼女がいかにジュードを身体的に受け入れていたかを物語っている。当時ジュードとスーの階級の者にとって避妊の実行が困難であったことを考慮に入れても、スーの三回の妊娠はそれまでの二人の延々と続く駆け引きを思うと唐突である[7]。またそのことを問題にしない語りの進行も不可解である。そしてスーの性欲の存在をかろうじて認める論文の中にもこのことに関する指摘はほとんどない。

実際スーの妊娠が彼女の性的快楽の結果であったことは、ファーザー・タイムによる子供たちの殺害事件後のスー自身の後悔の言葉に明らかである。

> '.... I have thought that we have been selfish, careless, even impious, in our courses, you and I. Our life has been a vain attempt at self-delight. But self-abnegation is the higher road. We should mortify the flesh —— the terrible flesh —— the curse of Adam!'
>
> (Part Sixth: At Christminster Again-3. p.270.)

このようにジュードやフィロットソンにとってスーがどれほど性を感じさせないように見えたとしても、少なくとも性行為、妊娠、出産という一連の生殖活動を遂行できることを考えると、スーは性的に「正常」の範囲内にあると思われる[8]。

1.3

これまでテクストの表層においてわかりにくいとはいえ、スーの性的欲望が確かに存在したことを見た。当時の貸本屋、巡回図書館や雑誌への掲載という出版状況から、ハーディが読者の反発を恐れてスーの主体的性欲のあからさまな描写を控えたのであろうか。それだけでは十分な解答にならない。なぜなら他の登場人物の性欲は直接的に描かれているからである。アラベラと知り合った次の日のジュードの様子を見てみよう。

> In short, as if materially, a compelling arm of extraordinary muscular power seized hold of him —— something which had nothing in common with the spirits and influences that had moved him hitherto. This seemed to care little for his reason and his will, nothing for his so-called elevated intentions, and moved him along, as a violent schoolmaster a schoolboy he has seized by the collar, in a direction which tended towards the embrace of a woman for whom he had no respect, and whose life had nothing in common with his own except locality.
>
> (Part First: At Marygreen-7. p. 37.)

ジュードの抑制のきかない性欲は、アラベラとの不本意な結婚に直結するなどプロット進行の鍵として明示されている。ジュードよりずっと年上のフィロットソンはどうだろう。スーと再婚した後の友人ギリンガムとの会話の場面をみてみよう。

Phillotson was more evasive to-night. He did not care to admit clearly that his taking Sue to him again had at bottom nothing to do with repentance of letting her go, but was, primarily, a human instinct flying in the face of custom and profession.

(Part Sixth: At Christminster Again-5, p.288.)

フィロットソンの性的欲望も、ジュードの場合より控えめながら、語り手によって十分示唆されている。

それでは性欲の描写の明確さの違いにはジェンダーが絡んでいるのだろうか。それも決定的な解答ではない。なぜならスーと同じ女性であるアラベラの性欲は彼女の人物の主な特徴として前景化されているからだ。二人目の夫の死後ジュードを再び手に入れたくなったアラベラは、アニーとの会話の中で自分の抑制し難い思いを語っている。

'I do. But my wicked heart will ramble off in spite of myself!'

*

'What shall I do about it?' urged Arabella morbidly.

*

'Be dammed if I do! Feelings are feelings! I won't be a creeping hypocrite any longer —— so there!'

(Part Fifth: At Aldbrickham and Elsewhere-8, p.248.)

アラベラとスーの性欲の描写における違いに階級差が影響している可能性は完全に排除できない。しかしそれを差し引いても、主要登場人物の中でスーの性欲だけが極端に見えにくくなっていることは十分検討に値する。立て続けの妊娠という否定しがたい事実にもかかわらず、なぜ精神としてのスー像が確立されやすいのだろう。なぜスーの性的欲望だけがテクストで奇妙に抑圧されているのだろう。

2

前章では、妊娠を中心に捉え直すとスーには十分な性欲があったこと、にもかかわらず登場人物の中で唯一スーの性欲が見えにくくなっていることを指摘した。それではテクストそのものに、スーの性的欲望を結果として隠蔽する何らかの構造があるのではないだろうか。二つの構造を分析しよう。

2.1

第一の仕掛けはスーを見るジュードの視点およびジュードに焦点化した語り手の視点である。この小説ではスー、ジュード、アラベラ、フィロットソンの四人の主要な登場人物の中で、スーの内面だけが読者に直接わからないようになっている。他の登場人物を見てみよう。スーをジュードのもとに送り出すとき、その後病気になりスーの見舞いを受けたとき、再びスーとの結婚生活を決心した時などのフィロットソンの本音は、友人ギリンガムとの長い対話によって知ることができる。同様にアラベラの内面も、例えば農業祭でジュードに再び惚れ込むときなど、友人アニーに漏らす本音から知ることができる。ジュードの内面も、自由間接話法や「彼は思った」、「彼には思われた」という言い回しの多用からわかるように、彼の視線に寄り添う語り手によって伝えられる。学問を志す決心をしたとき、アラベラに魅惑されたとき、夜のクライストミンスターで過去の学

者たちの声を聞くとき、スーと運命のキスをした後に宗教の道を諦める決心をするときなど、例は枚挙にいとまがない。

スーの場合はどうだろう。スーも確かに登場人物たちとの会話の中で大いに発言している。その会話の相手は大部分がジュードであるが、ジュードは異性で自分が惹かれている相手である。同様に時々言葉を交わすアラベラは彼女が複雑な気持ちを抱いているライバルであり、またフィロットソンは異性で社会的利害の絡む人物である。よってこれらの会話から彼女の本音を読みとることは難しい。後にフィロットソンのもとに戻った際エドリン寡婦とも話すが、フィロットソンの何が気に入らないのかについては口を濁したままである。語り手もスーの内面にはほとんど立ち入らない。例えばアポロとヴィーナス像の購入は語り手だけが見ている場面であるが、語り手は彼女の行動を再現するにとどまっている。これらを考えると、読者に伝わるスー像の大部分は、主に彼女に惚れ込んでいるジュードの視線を一度通過したものであるといえる[9]。

それではジュードの印象をなるべく排除したスーは、果たしてジュードのいうほど、また多くの批評家が前提としているほど霊的な存在なのだろうか。スーの行動を振り返ってみよう。例えばメルチェスターでジュードと待ち合わせをしたとき、スーの空腹があまりにもひどいので二人が真っ先に食事を取りに行くエピソードは、彼女の生身の人間としての身体性を表している。またスーには、ジュードに自分の写真をあげたり、シェリーの詩のヒロインを自分のことだといってほしいと強要するなど十分現実味のある俗っぽい少女趣味がみられる。

そして大学生との奇妙な同棲生活などスーの男性との関係には確かに従来の型にはまりきらない部分もあるが、彼女がジュードの言うほど「新しい」わけでないことは、彼女の取った因習的な行動に現れている。決定的な例は、これもテクスト内で不思議に不問に付されているのだが、社会的安定のためにフィロットソンと安易に婚約したことである。また既存の結婚観を拒否するようでありながら、ジュードの妻であったという事実だけでアラベラに激しく嫉妬し、ジュードが彼女と接触すると不安になり、自分の肉体でジュードを引き留めるという行動に出てしまう。このように結婚という当時の女性にとって最も重大な事柄の一つを軸に見てみると、スーは決してジュードの言うほど「新しい女」ではない。

現にアラベラから見たスーはジュードがいうほど世間離れした存在ではない。アラベラはスーに、きっと誰にでもそうしたようにジュードと正式に結婚することを忠告する。農業祭で見かけたときもジュードがスーに惚れていることには嫉妬しても、スーという人物自体の魅力には嫉妬していない。

そして肉体性が強調されるそのアラベラと、ジュードが精神的だと言い続けるスーの間には相似が見られる。両者ともジュードを愛して嫉妬に燃え、ファーザータイムの母親になり、社会的な打算から結婚し、身勝手に夫を捨て、再び夫の元に戻る[10]。

それではスー自身は自分のことをどう思っているのだろう。先ほど述べたようにスーの会話の相手がたいていジュードであることを考えると、彼女の発言から完全な真意を掴むことは難しいが、少なくとも彼女自身は数回に渡って、ジュードが解釈する自分とスー自身から見た自分のずれを指摘している。次は師範学校で監禁されたスーがジュードのもとへ逃げて来た時の会話である。スーが大学生との同棲生活において性的関係を持たなかったことについて二人は話している。

> 'I quite believe you. But some women would not have remained as they began.'
>
> 'Perhaps not. Better women would not. People say I must be cold-natured, —— sexless —— on account of it. But I won't have it! Some of the most passionately erotic poets have been the most self-contained in their daily lives.'
>
> (Part Third: At Meschester-4. p. 119)

この他にも自分はジュードがいうほど新しい女でも良い人間でもないこと、自分は悪い人間であり、そのような不完全な人間をジュードが好きになってくれてうれしいことなどを話している[11]。

これらを考え併せると、読者に伝えられる霊的な存在としてのスー像は、かなりの部分がスーに恋するジュードのまなざしによって構築されたこと、スーは必ずしもジュードの主張するほど生身の人間性を欠いた存在ではないことがわかる。

2.2

精神としてのスー像が主にジュードのまなざしによって構築されたことを述べた。次にスーの性欲を見えにくくするもう一つの構造として、スーの性にまつわる態度の変遷の描写が欠落していることを検討しよう。一大決心をして夫フィロットソンのもとを去ったスーであったが、ジュードとホテルの同室に泊まるのを拒み、同棲生活に入っても寝室を別にする。二人の葛藤は話し合いの形で克明に再現される。アラベラが出現して不安に陥ったスーはついに性行為を決心するが、それは追いつめられたスーの消極的かつ不可避な選択として描写されている。ところがいつの間にかスーは三人の子供を妊娠している。

その間の約二年半は、その中身のみならず、省略したこと自体がわかりにくい書き方をされている。部や章の冒頭で明らかにされるわけでもない。ここで問題の第五部「オールドブリッカムとその他の場所で」の流れを軽くまとめよう。第二章でアラベラ訪問が契機となりスーとジュードは初めて性行為に至る。第三章でファーザー・タイムが到着し、第四章で結婚を決心するものの直前で失敗、第五章冒頭で語り手が登場して農業祭に場面を移す。第六章で村の女たちの会話からわかるようにスーは妊娠しており、それがスキャンダルになったため二人は町を出る。第七章もようやく四段落目にして「このように二年半が過ぎた」と挿入される。その次の次の段落で「アラベラが農業祭で二人を見かけてから約三年後の五月のある土曜日の夕方」と説明が入り、スーが三人目を妊娠中であることがわかる。この二、三年の空白についての指摘は少ない。かろうじてアルバート・ゲラードはこの空白について、この小説がジュードの人生にとって意義のあることだけを選択しているからだと苦しい説明を行っている[12]。しかしスーとの性的関係の実現がジュードにとって意義がないとは考えがたい。

もう少し詳しく見てみよう。「オールドブリッカムとその他の場所で」の第五章の冒頭で、それまでジュードの視点に寄り添うばかりで存在感の薄かった語り手が唐突に登場し一般論をぶつ。

> The propose of a chronicler of moods and deeds does not require him to express his personal views upon the grave controversy above given. That the twain were happy —— between their times of sadness —— was indubitable.
>
> (Part Fifth: At Aldbrickham and Elsewhere-5, p.227.)

そしてここから四つ目の段落で、語り手はこれまでのようなリアリズムではなくむしろロマンスに近い語り口でストーク・ベアヒルズの街の農業祭に場面を移す。

> On a certain day, however, in the particular year which has now been reached by this narrative —— the month being early June —— the features of the town excite little interest, though many visitors arrive by the trains; . .
>
> (Part Fifth: At Aldbrickham and Elsewhere-5, p.227.)

このような語り手の登場はこの小説において例外的である。そして「ある日のこと」という表現からもわかるように、語り手はスーとジュードの初めての性行為の日から具体的にどのくらいの時間が経過したのかを明示しない。そのせいか語り手が時間の省略を行っていること自体も曖昧である。この第五部の第五章から第七章にかけて唯一この小説の語りは変調する。

農業祭の場面においても、ジュードとスーは確かに愛し合っているのだが、その熱愛ぶりは子供の未熟な性を連想させている[13]。その様子は主にアラベラの嫉妬深い目を通して読者に伝えられるが、例えばジュードの手がスーの手を探す場面では、アラベラの「馬鹿な人たち、二人とも子供みたい」というせりふが挿入される。エロティックだと指摘されるジュードに押されたスーがバラの中に埋まる場面でも、ジュードはスーに「うん、ぼくの赤ちゃん」と呼びかける。つまりたとえスーとジュードがアラベラの来訪した日に性行為に及んだことは想像できるにしても、ここでの子供っぽい二人の様子から、その後妊娠の連続に至るほど二人の関係が変化したことを読みとることは難しい。読者がスーの妊娠を知るには、第六章で十戒の碑文の化粧直しをするジュードとスーを見た町の女たちのうわさ話まで待たねばならない。

> 'She's his wife, I suppose?'
> 'Some say Yes: some say No,' was the reply from the charwomen.
> 'Not? Then she ought to be, or somebody's —— that's very clear!'
>
> (Part Fifth: At Aldbrickham and Elsewhere-6, p.237.)

この場面で小説の内部にいる町の女たちの目には明白なスーの妊娠の事実を、語り手は読者に直接地の文で語ることはしない。その後第七章も少し過ぎてからようやく、スーがすでに子供を二人出産し三人目を妊娠中であることが、これまた地の文からではなくアラベラとスーの会話から明らかになる。

同棲前そして同棲開始後もあれほどしつこくセクシュアリティと結婚観について議論を重ねていたジュードとスーは、読者の知らぬ間に三人の子供を作っていた。二人の性をめぐる態度の変化は重要であるはずなのに、なぜその過程はこのような形でテクストから脱落しているのであろうか。これは単なる物語につきものの時間の省略ではない。この小説における他の比較的大規模な時間の省略はずっと単純であり、いつからどのくらいの期間が省略されたかがはっきり説明されているし、その間に重要なことが起こるわけでもない。

他の省略を見てみよう。例えば「メアリーグリーンで」の第五章ではジュードが十五歳くらいから十九歳になるまでの三、四年が飛ばされているが、その間少年ジュードがどのように古典語にいそしんだかの説明がちゃんとなされている[14]。同じく第九章ではアラベラと逢瀬を重ねるジュードの二ヶ月が飛ばされているが、その間二人は頻繁に会っていたと書かれている[15]。「クライストミンスターで」の冒頭でも三年が省略されているが、「ジュードの人生の次なる筆記すべき動きは」とあるように、クライストミンスター行き実現に無関係の出来事は省くという語り手の一応の断りがある[16]。

それではこのような曖昧な省略は小説家ハーディの一技法であるのだろうか。それだけではこの唐突で曖昧な省略の謎は解けない。確かにハーディは他の小説においても省略を行っているが、それらの省略と今問題になっている省略は性質が異なっている。例えば『カスターブリッジの市長』では、第一章で妻を売ったならず者のヘンチャードが第三章でいきなり市長になっているが、この時間の省略は小説をよりドラマティックに演出する機能を担っている。むしろ空白の年月におけるヘンチャードの社会的上昇こそが、後の下降とともにこの小説のテーマになっており、この空白は明確に読者に知らされるべき事実として扱われている。

『日陰者ジュード』と同様ヒロインのセクシュアリティがプロット進行の大きな鍵となっている『テス』の

場合はどうだろうか。テスがアレックの愛人になったことを知ったエンジェル・クレアがどれだけ驚愕しようとも、父の死後路頭に迷うダービーフィールド家の前にアレックが現れテスと引き替えに一家を救おうとほのめかすこと、その後しばらくしてエンジェルがテスの母親を訪問した際赤貧にあえいでいるはずの母親の身なりが悪くなくテスの近況について口ごもることなどから、勘のいい読者には事態を予想できるようになっている。

もしも『日陰者ジュード』で空白の二年半における性をめぐるスーとジュードの変化がもう少し詳細に描かれていれば、スーが生殖という点では極めて正常な生活を送っていたことがわかりやすくなったはずである。しかし約二年半の空白の後、スーは既に子供を持つ「母」となっている[17]。アラベラの訪問以前にあれほど取りざたされたスーとジュードの性のあり方は、第五部の第五章を境に議論されなくなり、再び議論されるのは子供たちの悲惨な死の後である。その議論の内容である連続の妊娠に至った期間も、自らの行為を痛烈に後悔しているスーによって決別すべき過去として時間的、心理的距離を置いて語られる。ゆえに存在したはずのスーの性的欲望、快楽はすでに現実味を失っている。

スーの性的欲望の変遷を振り返ろう。フィロットソンと結婚したときは、唯一性的欲望を発揮することが許される対象である彼を拒否しているためにその存在は感じられない。しかしジュードと同棲しアラベラが訪問した後の二、三年間、彼女の性的欲望は十分正常に機能していた。その後悲惨な子供たちの死によって自分の欲望を罰する方向に向かう。よって自分が欲望をかき立てられるジュードのもとを去り、欲望を抱くことのできないフィロットソンをあえて再選択する。これはジュードを「喜ばせるために」買った寝間着を燃やす行為に端的に現れている。このようにスーには性的な変遷がある。しかし彼女のセクシュアル・ヒストリーの中で唯一の欲望の解放期間が語りレベルでブランクになっているために、しかもブランクになっていること自体がわかりにくい構造になっているために、彼女の欲望の存在は見えにい結果となっている。

3

読者に伝えられるスー像がジュードの視点を通過していること、スーの性的変遷の描写が欠落していることの二つが、実は存在したスーの性欲を稀薄に見せていることを論じてきた。それではなぜジュードは、一方であれだけスーとの身体的接触を求めながら、他方でスーの精神性を崇め続けるのだろう。スーが連続して妊娠した空白の二年半について、重要な期間であるにもかかわらず、なぜテクストは沈黙しているのだろう。最後になぜスーの性欲がテクストで奇妙に抑圧されているのかを、三つの異なるレベル、小説の中のレベル、語りのレベル、作者ハーディの執筆のレベルにおいて分析したい。

3.1

まずテクストのスーの肉体性の抑圧は、小説の内部においてジュードが自分の二大欠点である飲酒癖と性欲を抑圧しようとしていることと関係している。ジュードがこの二つを抑圧するためには、アラベラを抑圧する必要がある。アラベラはジュードの二つの弱点である「女」と「酒」を同時に体現しているのだ。

若きジュードはアラベラの魅力に負けてやむを得ず結婚した。そして結婚早々大いに落胆すると共に、アラベラの性的魅力に負けたことこそがクライストミンスター行きを阻止したと考える。よってアラベラのオーストラリア移住後すぐにその夢は再開される。アラベラは結婚前も離婚後もバーメイドとして働いていた。クライストミンスターでジュードが彼女と劇的な再会をするのも飲み屋であった。ジュードはスーとの約束をすっぽかしアラベラとホテルに泊まる。この直後スーに出くわしたジュードは、アラベラとの関係とスーとの関係

を比較して苦しむ。ここでのスーかアラベラかという二者択一は、ジュードが誘惑にうち勝つか負けるかという善悪の選択にすりかわっている。つまりスーはジュードにとっての善に、アラベラは悪に還元されている。ジュードがアラベラとの関係において過去に苦しみ、これからも再び猛威を振るう可能性のある飲酒癖と女好きという自分の二大悪を否定するには、スーとの関係においてその反対物である善と精神性を強調することが必要になる。それはファーザー・タイムの殺害事件後のジュードの言葉に明らかである。

> 'O Sue!' said he with a sudden sense of his own danger. 'Do not do an immoral thing for moral reasons! You have been my social salvation. Stay with me for humanity's sake! You know what a weak fellow I am. My two Arch Enemies you know —— my weakness for womankind and my impulse to strong liquor. Don't abandon me to them, Sue, to save your own soul only!'
>
> (Part Sixth: At Christminster Again-3, p.278. 下線部筆者)

ジュードにとって、スーを精神的なものにすることによって初めて、アラベラによって抱くに至った女性嫌悪や不安を克服しつつ、同時に女性を愛するという離れ業が可能になる。ジュードが実際にスーに会う前に写真を見ただけでプラトニックな思いを抱くことは、性欲が契機となって行ったアラベラとの結婚への反動をよく表している。

ジュードはいわば自分の欠点を抑圧するために、スーが否定を試みるにもかかわらず、スーを精神的なるもの、「新しい女」として崇め続ける。ジュードは少なくとも空白の二年半が来るまでの間、「肉体を持たない」とか「新しい女」の名の下にスーの主体性を抑圧している。そしてそのようなジュードの断固たるまなざしを意識するあまり、スーが自分の性的欲望を抑圧せざるを得なかった可能性は排除できない。このようにジュードによるスーの精神性の強調は彼自身の葛藤の結果である。

3.2

小説内のレベルでジュードが自分の悪と必死に折り合おうと試みたことが彼の精神としてのスー像の指向につながったことを述べたが、語りのレベルにおいてもある指向があり、それがスーの性欲の見えにくさを招いている。語りレベルでスーの肉体が欠落するのは、語り手がジュードの欲望を中心に語りを進めることと関係している。小説は一貫してジュードの野心と欲望を追っている。最初にジュードの欲望はクライストミンスターの学問の世界に向き、次にアラベラの肉体に、アラベラが去った後は再びクライストミンスターに向けられる。第一部「メアリーグリーンで」の最後の「彼の地へ」(Thither)という言葉はプロット展開の方向性を決定するジュードの欲望を象徴している。そしてクライストミンスターに到着すると、欲望はスーに会うことに、スーと知り合った後はスーとの肉体的接触に向かう。そしてついにその欲望が満たされ三人の子を持つ父となった時、ジュードは再びクライストミンスターを目指す。子供たちの悲惨な死の後スーと別れてからは、スーからの手紙を待ちわび、最後には自殺を覚悟でスーを目指して旅に出る。ジュードの死とともに小説はようやく終わる。つまりジュードの欲望が消滅したときに小説は終わるのだ[18]。

このようにジュードの欲望がプロットを前進させる最大の原動力になっているこの小説で、その欲望が満たされていた唯一の時間があの空白の二年半なのである。そのように考えるとジュードの欲望がその後スーから再びクライストミンスターに向かったという事実は、スーへの欲望が充足されたことを示唆している。農業祭を振り返ろう。アラベラがスーとジュードの熱愛ぶりをそっと見ている場面である。

Then she [Sue] looked up at him, and smiled in a way that told so much to Arabella.
'Happy?' he murmured.
She nodded. (Part Fifth: At Aldbrickham and Elsewhere- 5. pp.233-234,)

ここからもわかるように、あの空白の二年半は幸福の二年半であった。そして欲望が充足されている幸福な期間、この小説を前に進める力、テクストのエロスは停止する[19]。前章で引用を用いて見たようにその期間の語りが突然変調するのはそのためである。そしてジュードの欲望を追うテクストにおいて、そのエロスの停止期間の記述は省略される結果となる。

3.3

今述べたようにジュードの欲望が満たされることはジュードにとって最大の幸福のはずである。その幸福が語りレベルで抑圧されることは、作者ハーディのある指向とも関係している。ハーディの悲劇への指向である。最後にハーディがこの小説を悲劇として描こうとしたことが、スーの性欲がテクストで抑圧される結果になったことを指摘したい[20]。ハーディが悲劇を目指していたことは、第一版の序文や1895年11月10日のフローレンス・ヘニカーあての手紙における「悲劇」という言葉の使用から明らかである[21]。なぜハーディが悲劇に傾斜したのかという伝記的理由の追及はこの論文の主旨ではないので差し置くが、ハーディのペシミズムが深まってゆく経緯は主要作品における特に男女関係に関する語り手の態度に集約されているように思われる。そして語り手の態度がある程度作者ハーディの態度と連動していることが、作品の序文や後書きから読みとれる。

『狂乱の群を離れて(1874)』では、語り手は土地の事情に通じた者として読者の優位に立ち、男女の関係について単純な一般化を頻繁に行い、バスシバの内面にも自由に出入りし、恋について長々と意見を述べる[22]。序文でハーディは「ウェセックス」という地名について解説するが、その語り口は極めて明快である。スーと同様に物議をかもすヒロイン、ユーステイシアが登場する『帰郷(1878)』では、『狂乱の群を離れて』同様、男と女は相対するか一致するかどちらかであるという考えを表明し、恋に落ちた登場人物たちの内面に自由に出入りする[23]。ごく短い序文とさらに短い後書きでは、ハーディは再び舞台となった土地について話す。『キャスターブリッジの市長(1886)』になると、語り手はこれまでのような無邪気な一般化はほとんど行わないが、時々読者に話しかけ、後半では登場人物の内面に入ることもある[24]。序文では妻売りなど小説の舞台となった時代の風俗やファーフレーのスコットランド訛りに言及している。

『テス(1891)』に至っては、語り手は恋愛論を披露することはほとんどないが、「当時のテスは」と説明するなど、一応は物語全体を把握した者として読者を導いている。ハーディは1891年の第一版に寄せて、作品が小説という虚構の形を取っていてもその内容は真実であることを述べている。第五版以降への長い序文では、小説が議論や信条でなく印象を表すものであることを強調し、作品を批判した批評家たちに対して回りくどい皮肉で自己擁護しているが、小説のテーマに関する自分の意見は今ひとつ曖昧にしている[25]。

そして『日陰者ジュード』に至っては、シャストンの町の説明や先に引用した第五部第五章でストーク・ベアヒルズの町に場面を移す時などごく僅かな場合を除いて、語り手はすっかり息をひそめている。登場人物たちについての判断も下さない。よってこの作品に現れる思想はほぼすべて登場人物たちの口から発せられたものである。そして語り手の遠慮は後書きの作家ハーディの歯切れの悪さに通じている。「自分が書いた本に著者が意識的に書いた以上のことがありうることは疑いがない」と漏らすところに、ジュードとスーのあり方に対して判断を控えるハーディの姿が見える。また1896年6月1日、ヘニカーに宛てて、「満足しうる男女の組み合わせの型など思いつかない」と告白している[26]。『テス』では最後にエンジェルとテスの妹ライザ・ルーの結婚がほ

のめかされ未来への希望がかろうじて見いだされたのだが、『日陰者ジュード』では子供たちも主人公ジュードも絶命し、スーとジュードの未来への希望は完全に断たれた形で終わっている。それがハーディの小説断筆を象徴的に表している可能性は否めない。

あの空白の二年半の間、スーが三回妊娠したことが示唆するように、ジュードは長らく待ち望んだ幸福をついに味わっていたはずである。そしてスーもつかの間ある程度の自由を謳歌していたはずである。しかし二人の幸せの絶頂期の唯一の描写である農業祭の場面も、アラベラの嫉妬と意地悪の目を通して眺められることで、不吉な予感を漂わせている[27]。主人公ジュードとの仲を円滑にするスーの性的欲望は、本作品においていわば幸福の象徴、幸福の最大の前提である。だからこそ悲劇的効果を高めるためにそれはテクスト内で抑圧される必要があった。

4

これまでなぜテクストでスーの問題をはらむセクシュアリティが前景化されているのに対し、彼女の主体的性欲は極端に見えにくくなっているかを論じてきた。そしてジュードのまなざしを通過したスー像、妊娠に至るスーの変遷の描写の欠落という二つの構造を分析し、最後になぜそのような構造にならざるを得なかったかを論じた。物語内のレベルにおける主人公ジュードの精神性と善への指向、語りのレベルにおけるジュードの欲望を追う語りの指向、そしてそれらを生成する作者ハーディの悲劇への指向という三つの指向のためには、スーの性的欲望はテクストで抑圧されなければならなかったのである。

注

(1) Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, Second ed. New York & London: Norton 1999, p.194.

(2) 『「新しい女たち」の世紀末』みすず書房、1999年。第17章パラドックスとしての「新しい女」。また精神としてのスー像に影響の大きいものとして D. H. Lawrence, *Male and Female* in *Jude the Obscure*, Norton, p. 412- 424. 参照。

(3) 「セクシュアリティ」という概念定義の困難および本質的不可能性については次の本に詳しい。赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』頸草書房、1999年。本論文では、「性的欲望」は性行為そのものへの欲望を、「セクシュアリティ」は性行為を取り巻く性的なものの総体を指示する。

(4) Blakeはスーが性のバリアを取り除くために自らの性欲という性的要素を抑圧するが、そのためにはまず前提とし性欲がなければならないと指摘する。Kathleen Blake, *Sue Bridehead, "The Woman of the Feminist Movement"* in *Modern Critical Interpretations.* ed. by Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987, p. 87. Maynardはギリシャの像やシェリーの詩などからスーが性にほとんど夢中だと指摘する。John Maynard, *Victorian Discourses on Sexuality and Religion,* Cambridge U. P. 1993, p. 287. Summerはスーについて「セックスで頭がいっぱい」だと指摘する。Rosemary Summer, *Thomas Hardy: Psychological Novelist,* London: Macmillan 1981, p. 174. Morganはスーの性的情熱が彼女の政治的発言を弱小化させることをハーディが考慮したと考える。Rosemarie Morgan, *Woman & Sexuality in the Novels of Thomas hardy.* London & New York: Routledge, 1988, p. 124. またバラの中に埋もれる場面が性的比喩であると指摘する。p. 152.

(5) スーの複雑なセクシュアリティをフェミニズムなど時代のコンテクストから読み解こうとする試みは多い。Blake, pp. 61- 72. Terry Eagleton, *The Limits of Art* in *MCI,* pp. 61- 71. Robert Gittings, *Sue as "a Girl of the 1860s"* in *Jude the Obscure,* Norton, pp.427- 430. Morgan, pp.110- 154. またフーコーはヴィクトリア調では一方で性が抑圧されながら、性に関する言説が盛んにみられたことの二重性を指摘する。『性の歴史Ⅰ 知への意志』渡辺守章訳、新潮社1986年。

(6) *Jude the Obscure,* p. 173.

(7) 当時の避妊に関しては荻野美穂『生殖の政治学 フェミニズムとバース・コントロール』山川出版社、1994年参照。

(8) 何が性的に「正常」か「異常」かは本論文では古典的なフロイトの定義に従い、生殖に繋がる性的行為を正常、生殖を目的としない性的行為を異常とする。『フロイト著作集第五巻性欲論三篇』Ⅰ 性的な錯行、人文書院、1969年、20頁参照。

(9) Penny Boumelha, *A "Double Tragedy",* Norton, p.445.

(10) イーグルトンは二人がともに個人主義者でありジュードを利用することにおいて共通していて、アラベラはそれに気づいてさえいると指摘する。Terry Eagleton, *The Limits of Art,* in *MCI,* p. 69.

(11) *Jude the Obscure.* p. 111, 118, 204-205, 275などを参照。

(12) Albert J Guerard, *Hardy's Portrait of Sue Bridehead* in *Jude the Obscure,* Norton, p. 425.

(13) 二人の子供っぽさについてはEmma Clifford, *The Child and the Circus* in *Jude the Obscure,* First ed. Norton 1978, pp.439 − 465参照。

(14) *Jude the Obscure,* pp. 27-31.

(15) *Jude the Obscure,* p. 47.

(16) *Jude the Obscure,* p. 62.

(17) スーの母性に注目した論文が意外に少ない中で、土屋倭子はスーの妊娠に鋭く着目しているが、性行為が母になることに直結する苦悩に注目し、スーは結婚制度は拒否したが母性という「制度」に抗うことは難しかったと指摘する。『「女」という制度 トマス・ハーディの小説と女たち』南雲堂、2000年、214-221頁。母性という名のもとに母親スーの性がある程度タブーの度合いを低め、母親になることに先行する生殖行為そのもの、そしてそれに付随する性的欲望が不問に付された可能性は検討に値するだろう。

(18) 語りの欲望についてはPeter Brooks, *Reading for the Plot,* chapter 2. Narrative Desire. Cambridge & London: Harvard UP, 1984参照。また主人公の死が語りの究極的到着地点であることについてはchapter 1. Reading for the Plot, pp. 21-23を参照。またガーソンはジュードの欠如(wants)と欲望(wanting)がプロット、人物、感情のトーンを与えると指摘している。Marjorie Garson, *Hardy's Fables of Integrity: Woman, Body, Texts,* Oxford: Olarendon Press, 1991, p. 152.

(19) Brooks, p. 37.

(20) ゲラードはこの作品が悲劇であり、悲劇というジャンルのシンボリックな書き方や、人物についてすべてを明らかにしない性質が幸福な数年の省略に関係していると考える。*Jude the Obscure,* p. 425.

(21) *Jude the Obscure,* p. 346.

(22) *Far from the Madding Crowd,* Oxford, 1993.

(23) *The Return of the Native,* Penguin Classics, 1985.

(24) *The Mayor of Casterbridge,* Penguin Classics, 1997.

(25) *Tess of the d'Urberbilles,* Norton, 1991, ed. by Scott Elledge, pp. x-xi. エレジの注によるとハーディは自分は読者に特定の視点を押しつけるのでなく、自分が観察したものの精密な記録を自分の視点から再現するだけだと繰り返し様々な言い方で述べているという。

(26) *Jude the Obscure,* p. 349.

(27) Michael Millgate, *The Tragedy of Unfulfilled Aims,* in *MCI,* p. 11.